

1 教員とは何か

中学生は、自分とは何者か、生きるとはどういうことか、死とは何か、これら人生における根源的で本質的な問いかけに苦悩する思春期只中に生きている。中学校の教員は、思春期の複雑な葛藤や矛盾に寄り添い、その発達を支援できる大人であることが求められる。教員はその自覚を持って日々の生活を生きていくことが求められていることを自覚するよう、様々な機会を通じて自己研鑽して欲しい。

生徒は言っていた。「生徒に向き合う時間をたくさん作って欲しい。」「僕たちと遊んで欲しい。」と。生徒は教員を求めているのである。

2 教員の感性

いうまでもなく、教員は子どもにとって、一番の理解者である。また、そうであつて欲しいと願うのは、子どもを学校に預けている親ならば、誰もが望むところである。子どもの目に映る教員像の中で、一番困るのは、子どもの危機的状況においても察知せず（察知出来ずという場合もある。）、そのまま「見て見ぬふりをする。」および教育に携わる者らしからぬ、教育の立場からはあつて欲しくないような教員である。もちろん主観的には、何とかしたいとの思いがなくてはならないだろう。しかしながら、展開する子どもの状況に余りにもついてゆけない自分の力量の乏しさがあり、一人で抱え込んでしまう教員像が見えてくる。

ところで、「いじめ」の問題で今教員に求められることは、子どもの声に耳を傾け、こころの叫びや言動の裏側にある感情をしっかりと読み取ることが大切だと言われている。子ども自身がどういった立場におかれ、どういう気持ちでいるのかという子どもの心情を推し量ることができる力の育成が求められている。「先生は、子どもたちの顔を見るよりも、パソコンの画面を見ている時間のほうが長い」と言われ、今日の教育現場が抑圧されることがある。子どもと関わる時間を確保し、子どもの話に耳を傾けることは、生徒理解、生徒指導の基本である。

教員自身の感性を磨くことは、教員の日々の忙しさに難しいことではある。しかし、難しいからしなくてもいいものではなく、子どものところを受け止めることは、どのような場合であっても教員として必ずやらねばならないことである。感性を磨くことは日々教員自身が意識して取り組むことは言うまでもないが、教員研修に取り入れることを提案したい。5年目、10年目の前目の研修で、1年か少なくとも6ヶ月間、地元福祉施設、介護施設、養護施設、情緒障害児短期治療施設、鑑別所、少年院などで、教員の普段の生活と関連が少くないところで、実際に働き、目で見て、耳で聞き、身体全身で現実を感じ、忙しさをこころの奥底で眠っている感性を呼び起こしてほしい。その感性が、子どもとの関わりで重要なものになってくる。

3 いじめ認識、研修

先般文部科学省の平成24年4月から9月までのいじめの調査結果が発表された。いじめの件数やその割合が、都道府県により160倍もの差があるというニュースがあった。調査方法の違いによるものではと報道されていた。何がいじめで、何がいじめではないのかを決めるのは、教員でも学校でも教育委員会でもない。子ども自身がどう感じたか、どう思っているのかポイントである。教員は子どもたちのところに寄り添い、こころの奥底にある心情を理解することからはじめる必要がある。

いじめは何処でも、何時でも子どもたちに関与している教員をはじめ大人たちが、起こらないように、その子どもたちに関与している教員をはじめ大人たちが、今日のいじめの構図や成り立ち、いじめを起ささない集団づくりやいじめ発見法等の、研修、研鑽を積むことが求められる。

まずは教員にとって見えにくいいじめの存在に敏感になるために、ひとつにはいじめが生徒集団内で起こる構造について理解を深めることが必要となる。森田洋司らはいじめが一筋縄で把握できないことについて、次のように述べている。

・友だちの数が多くても、いじめの被害から逃れることはできない。
 ・これまで、一般的に、いじめの被害者には友人が少なかったことが指摘されてきた。また、今回の調査でも同様の傾向があることがわかっている。ところが、この友人の数といじめた子との関係を見ると、クラスの中かの親しい友だちの人数が多くなければなるほど、「よくいっしょに遊んだり話したりする友だち」からいじめられた子の割合が多くなることがわかったのである。
 つまり、友だちがたぐさんいるといじめられにくいとは、単純にはいえず、できるだけクラスに友達を多く持つことが、いじめの被害から逃れる手段になるとはかぎらないわけである。これは、今後いじめを指導する際に注意すべき点と思われる。（竹村一夫）
 ・仲のよい友だちから反復性の高いいじめを受けている場合も四人に一人いて、その場合はいじめの継続期間も長いケースが多くなる。

（森田洋司、滝充、兼政春、星野周弘、若井彌一編著『日本のいじめ—予防・対応に生かすデータ集』（金子書房、1999年）

また、自死にまでつながるグループ内いじめの本質について森田らは次のように的確に指摘している。

いじめ空間の閉鎖性—いじめが起こつても、子ども達がいじめの場から逃げ